

長崎は今日も晴れだった

8月の終わり、長崎で研修がありました。
歌のように雨が多いのかなと思って行ったら
人生初の長崎滞在は、晴れ、晴れ、晴れ。
じりじりと肌を焼き付ける太陽。道ばたにはハイビスカス。
やはりそこは南国でした。

半日ツアーで隠れキリシタンの村にも行きました。
東シナ海からそそり立つ山の斜面に人目を避けるように
当時から続く教会や福祉施設、授産施設がありました。
今でも毎週礼拝が行われ、脈々と信仰が受け継がれています。
その血をひく何人かの方々が施設や歴史の案内をしてくれました。
130年前には道も通っていなかった村で弾圧をかいぐり
献身的に人々を守り育てたフランスのドロ神父。
彼が運び入れた当時仏でも最先端のリードオルガンが現存していました。
シスターが目の前で奏でてくれると、その、やさしい響きに心癒されました。

最終日の講演は「こうのとりのゆりかご」。
ご存知でしょうか、薬師丸ひろ子が演じてドラマにもなった
2007年、熊本・慈恵病院に設置された日本初の赤ちゃんポスト。
主人公のモデルともなった看護部長の田尻由貴子さんは講演で
「赤ちゃんや幼い子にとって何より大切な保護者との愛着関係。
それが様々な理由で実現できず、時に生んだばかりの子を悲惨な形で
放置せねばならないケースも増えている。最後のセーフティーネットが
『こうのとりのゆりかご』。けれど大切なのはその前の相談活動なのです」と。
彼女の関わった20代女性の分娩室での映像が心に残りました。
出産近いその日、雨の中、タクシーから足早に分娩室に向かう夫婦がいた。
長らく妊娠を望むもかなわず、慈恵病院がとりもつ特別養子縁組に応募した。
最後の説明を受け、マタニティーに身を包んだ妻は夫に肩を支えられ部屋へ。
母親と気持ちを共有してもらうための病院の配慮なのだそう。
夫婦は両手で顔を覆い、その時を祈り待つ。
衝立の先の母親と顔を合わすことは決まっていた。
様態が急変。帝王切開の必要。生まれるも…泣かない。
スタッフの懸命の努力。ついに、産声。涙して抱き合う夫婦。
数秒後、助産師に抱かれて衝立から現れた真っ赤な小さい顔。
手渡され、そおっと優しく抱き締め、「人生でいちばん幸せな瞬間です」。
新しい親子が誕生した瞬間だった。

あなたがいてくれる、それだけで幸せ。
そんな愛着の原点を深く考える機会を与えられた研修でした。
そして会場を出ると、長崎は今日も晴れだった。

(つくし保育園園長 つだかずお)